

第十七章 「不老会」の設立とその発展

1 五〇〇体の観音像

昭和三十二年、愛知用水の工事は、牧尾ダム、幹線水路、三好池、上流下流とも、いっせいに始まった。

牧尾ダムはロックフィル型式の工事。中央止水壁付近の床掘り、グラウト工事、右岸にバイパストンネル工事と全面的に始まった。とくにバイパストンネル工事では、火山性ガスの存在が予測されていたので十分に注意をしていたが、心配していた火山性ガスが爆発的に噴出して、現場付近の人が被害を受けた。現場主任の押切亀吉は「逃げる、逃げる」と走り廻って部下全員の避難を確認して最後に出てきたが、トンネル出口でバツタリ倒れて犠牲者第一号となり、同時に五人もの犠牲者が出た。

久野庄太郎さんは現場にとんで行って犠牲者を弔い、

「私が殺したようなものだ。私がこんな仕事を始めなければ、この人達は死ななかった。私が殺したようなものだ」

と、嘆き悲しみ現場にひれ伏した。戒名をもらって、家でも朝夕供養に努めたが、気がお

さまならない。

しかし工事は非情なもので、注意の上に注意をしても、次から次へと犠牲者は絶えることはなかった。そのつど現場に行つて供養をしたが、それでも気がおさまらない。ある時には、材料を積んだトラックが交通事故を起こすなど、非情にも惨事は次々と起こつた。

そこで、自身が人柱に立つて埋めてもらおうかとも考えたが、まず工事現場の土を集めて常滑の柴山青風先生に五百体の観音像を造ってもらつて犠牲のあるたびに持つて行つて弔つた。

愛知用水殉職者各々霊位

力を国産に尽くして生死を滅却し 今茲に昇天して涅槃寂浄たり 伏して願ひ敬して白す 無常に垂跡し盤植たる現実を更新し向上せしむことを

甚三撰

押切 亀吉

山形県北村山郡尾花沢町

牧尾ダム工事中

昭和三二年十二月二十四日死亡

渡辺 繁治

新潟県西蒲原郡岩室村

牧尾ダム工事中

昭和三三年二月二日死亡

享年四十歳

西田 敏男

熊本県天草郡大矢野町

牧尾ダム、バイパス工事中

昭和三三年三月二二日死亡

享年三十七歳

藤田多三郎

秋田県北秋田郡今川町

曲池（現三好池）工事中

昭和三三年三月二日死亡

享年二十四歳

高橋 昭二

愛媛県西条市中野甲

牧尾ダム工事中

昭和三四年三月四日死亡

享年三十一歳

西岡 武夫

徳島県三好町三庄村

牧尾ダム、二号バイパス工事中

昭和三三年五月一日死亡

享年四十六歳

金子 稚男

富山県魚津市金山谷

牧尾ダム、道路工事中

昭和三三年三月一日死亡

享年四十二歳

池田 武人

長野県飯田市虎岩巳

鞍馬橋工事中

昭和三三年七月二八日死亡

享年三十二歳

河村 襄

山口県玖珂郡周東村

牧尾ダム工事中

森井 良三

昭和三十三年九月五日死亡

享年四十二歳

滋賀県八日市市八日市

牧尾ダム、県道工事中

昭和三十三年九月六日死亡

享年五十一歳

大森益次郎

愛媛県東宇和郡野村町

牧尾ダム工事中（農林省中央青年隊所属）

昭和三十三年十月一二日死亡

享年十九歳

鷹尾 繁隆

愛媛県東宇和郡野村町

牧尾ダム工事中（農林省中央青年隊所属）

昭和三十三年十月二四日死亡

享年二十四歳

板谷 照夫

大分県日田郡中津江村

牧尾ダム工事中

昭和三十四年二月一日死亡

享年五十四歳

高山 良清

長野県松本市島田

牧尾ダム、道路工事中

昭和三十四年二月一九日死亡

享年三十二歳

松下 勲

滋賀県八日市市野口町

牧尾ダム建設資材運搬中

昭和三十三年一月一八日死亡

享年二十二歳

大田 一夫

富山県西砺波郡戸出町

牧尾ダム工事中

昭和三四年一月一日死亡

享年二十歳

箴島 勇

福岡県三潞郡城島町

牧尾ダム、落石事故

昭和三四年五月一日死亡

享年四十七歳

相良 勇

福島県相馬郡小高町

牧尾ダム誘導作業中

昭和三四年五月二九日死亡

享年五十一歳

迫尾 盛義

宮崎県西諸県郡野尻町

犬山市富士トンネル工事中

昭和三四年六月五日死亡

享年二十二歳

山崎儀三郎

大阪市生野区猪飼野東

牧尾ダム工事中

昭和三四年六月一九日死亡

享年二十五歳

石川 薫

長野県埴科郡坂城町

牧尾ダム工事中

昭和三四年七月六日死亡

享年四十一歳

中西 達雄

愛知県新城市野田

半田市にて伊勢湾台風による

昭和三四年九月二六日死亡

享年三十五歳

林 一義 長崎県諫早市湯之尾町

第一事業所用水工事中

昭和三四年九月一六日死亡 享年二十七歳

門脇 伸夫 宮城県玉造郡岩出山町

東海市富木島工事中

昭和三四年一月九日死亡 享年二十五歳

宮坂 修 石川県鳳至郡門前町

大神トンネル工事中

昭和三四年一月二日死亡 享年二十五歳

塔本 末藏 熊本市春日町

重機事故

昭和三四年一月三日死亡 享年四十八歳

エドワード 米国コロラド州パイニヤ

ロイド 牧尾ダム、工事技術指導中狭心症

ビーズレー 昭和三四年一二月一〇日死亡 享年六十三歳

岩本 一夫 岐阜県高山市下二之町

岐阜県今渡開水路工事中

昭和三四年一二月一〇日死亡 享年三十七歳

長江 岩造 岐阜県可児郡可児町今渡

岐阜県今渡開水路工事中

渡辺 金作

昭和三四年一月一日死亡 享年五十一歳
秋田県北秋田郡八郎潟町

岐阜県今渡開水路工事中

昭和三四年一月一日死亡 享年十九歳

青山 和夫

秋田県南秋田郡玉城町

岐阜県今渡開水路工事中

昭和三四年一月一日死亡 享年三十六歳

田地 正男

富山県氷見市森寺

長野県王滝森林鉄道付替工事中

昭和三四年九月一日死亡 享年二十八歳

駒形 勝重

新潟県南魚沼郡大和村

長野県王滝森林鉄道付替工事中

昭和三四年一月二〇日死亡 享年五十二歳

西本 博

山口県柳井市宮本

昭和三四年一月二六日死亡 享年三十四歳

村上 信夫

群馬県高崎市赤坂

昭和三四年一月二六日死亡 享年三十八歳

今村 輝治

熊本県阿蘇郡河陽町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年七月七日死亡 享年二十六歳

神成 幸雄

秋田県北秋田郡鷹巣町

昭和三五年四月一四日死亡

享年三十歳

阿部 忠明

宮城県栗原郡栗駒町

昭和三五年五月二一日死亡

享年二十歳

菅原 一雄

岩手県胆沢郡前沢町

昭和三五年六月一五日死亡

享年二十四歳

吉田 政一

福島県双葉郡大熊町

昭和三五年八月一日死亡

享年五十六歳

西野 勇

富山県下新川郡入善町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年八月五日死亡

享年二十三歳

竹本 辰造

富山県下新川郡入善町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年八月五日死亡

享年二十九歳

鈴木運一郎

秋田県平鹿郡大森町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年八月五日死亡

享年四十歳

白島 清松

富山県下新川郡入善町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年八月五日死亡

享年二十六歳

岡田 俊信

北海道三笠市弥生双葉町

愛知県豊明町サイフォン工事中

昭和三五年八月五日死亡

享年二十六歳

亀井 忠夫

山形県新庄市十日町

昭和三五年八月七日死亡

享年二十六歳

松村 彰

愛知県半田市花田町

愛知県阿久比町東浦支線工事中

昭和三五年八月二七日死亡

享年四十五歳

色川 清六

宮城県石巻市渡波

常滑市半田支線金色分水路工事中

昭和三五年一〇月一日死亡

享年三十二歳

島田 昭也

新潟県中魚沼郡津南町

愛知県美浜町古布、作業中

昭和三五年一月二日死亡

享年二十八歳

山本 義雄

富山県下新川郡朝日町

愛知県日進町岩藤トンネル工事中

昭和三五年一月二六日死亡

享年二十八歳

小島 一作

神奈川県愛甲郡愛川町

愛知県日進町岩藤トンネル工事中

昭和三五年一月二六日死亡

享年三十三歳

上條 常二

長野県東筑摩郡朝日村

愛知県日進町岩藤トンネル工事中

昭和三五年一月二六日死亡 享年二十六歳

荻本 勝之

大分県玖珠郡九重町

愛知県日進町岩藤トンネル工事中

昭和三五年一月二六日死亡 享年三十歳

平浜 豊

鹿児島県阿久根市脇本

名古屋市志段味第一トンネル工事中

昭和三五年一月二六日死亡 享年三十八歳

高橋 鶴吉

岩手県和賀郡江釣子村

岐阜県松野池工事中

昭和三五年一月三〇日死亡 享年四十五歳

三村 貞男

愛知県知多郡大府町大府

愛知県常滑市、水路工事中

昭和三六年九月八日死亡 享年四十二歳

2 勝沼精蔵先生の助言

昭和三十六年の夏のある日、平素御指導を仰いでいる名古屋大学総長勝沼精蔵先生のとこ
ろに一際大きい観音像を持って、総長室（旧歩兵十八連隊の連隊長室）にお礼に上がった。そ



勝沼清蔵先生

して、今の心境を訴えて、

「いっそ人柱に埋めてもらおうかと思う」

と話した。勝沼先生は、静かに、

「死ぬことはないよ。君は偉い。私は医者として今までに一人か二人の人を診たか知らないが、皆助けることはできなかった。君は愛知用水を造って、五〇万人、いや百万人以上の人に美しい水を飲ませ、人助けをしている。立派な仕事をしている。死ぬことはないよ」と静かに諭された。

「今、医者の養成で一番困っているのは、医者を育てるのに人体の構造を教えなければならぬことだ。そのために実際の人間の解剖をする必要があるが、戦後は人権を尊ぶ上から解剖用の遺体がなくて困っているのだよ。昔は重罪人で死刑になった人で遺族の引き取り手のない人。行路病者で遺族がなくて引き取り手のない人を警察の許可を得て解剖させてもらっていた。今もその通りだ。しかし、文化が進めば進むほど、人権が尊重されればされるほど、皆遺族が引き取って行ってしまつて、学生二人に一体という基準を満たすことができず、十人、二十人に一体ということで困っているのだよ。私も及ばずながら、頭は卒業した東大に、体は御世話になっている名大に寄付することにしてはいるよ」

と言われた。久野さんは、即座に、

「私もやります」

と言ったが、先生は、

「そんな簡単なものではないんだよ。帰って家人とよく相談して、家族の賛成が得られたら所定の様式で申し込むんだ」



加古文雄

と言われ、

「よし、私もそれをやる。お願いします。これで気が清々しました」

と言って、名古屋市役所前の土地改良会館に仮住まいをしていた愛知用水土地改良区にと
んできて、私に経緯を話した。

「私もやりましょう。どうせ、戦争で、大陸の高梁の肥となるか、南溟で蛆に食われる運
命にあった体、生き永らえているのが不思議」

と、私も言って笑って答えた。庄太郎さんが家に帰って、妻や子に話したら、みな賛成。
奥さんは、

「あなたの行く所なればどこにでも行きます」

これに力を得て、何事も相談に乗ってくれる加古文雄夫妻に話したら、大賛成。幼友達の
森田清松は、

「俺が知り合いを廻って仲間をつくってやる」

と言って毎日、八幡の仲間を廻り始めた。

かつての反対者が先頭に立つ

そこで、加古文雄氏が言うには、これは、入会申込書の完全な書式を名古屋大学で聞いて
きて、入会の規約を作って、事務所を久野さんの隠居所を借りて本格的に始めなければなら
ない、と。名古屋大学の松坂佐一医学部長を訪ねて、死体寄付の基本となる事項、今までの
「死体寄付のあり方などを聞いて帰り、久野さんの隠居所を事務所として、会の名称も「不老
会」とし、いよいよ献体事務を始めた。事務の手伝いに木村信介、早川三郎等が進んで協力



鰐部好一

をしてくれた。

佐布里池の建設の際、当初大反対で、久野が今度来たら嫌で切ってしまうとまで反対であった鰐部好一が、佐布里、阿久比を歩き廻って不老会への入会を説いて廻り、一人で三〇〇人以上の人を不老会に加入させ、森田清松、筒井栄太郎とともに昭和五十年の大会において、不老会の名の入った半纏はんてんを授与された。また昭和五十一年五月、佐布里池の北西の高地に愛知用水神社の建立と水利観音を祀ることに骨を折り、終生堂守りとなり、献体された。

3 不老会設立総会の開催（昭和三十七年一月二十一日）

昭和三十六年夏のある日、勝沼先生にお会いして、医科系大学で学生に教育する解剖用遺体のないことを聞いて以来、同志、知己に話したところ、賛成者が次から次へと出てきて、年内に二〇〇名を越す勢いとなった。そこで、年が明けたら早々に設立総会を催すことになった。何といっても受け入れ側の大学が、しっかりした体制を整えてくれなければならないので、大学側の出席を確認して日をきめ、名古屋駅前の愛知県中小企業センター四階会議室において設立総会を開いた。

当日までの入会者は一四〇名となり、出席者は九割以上、一二〇名を得、大学側からも名大総長勝沼精蔵、同医学部長松坂佐一の出席を得て盛大に催すことができた。

不老会発会式、昭和三十七年一月二十一日

〔不老会役員〕



用水工事の犠牲者と不老会の成願者を祀るために建立された愛知用水神社と愛知水利水観音。下左は水利観音菩薩像



名誉会長 勝沼精蔵

会長 久野庄太郎

理事長 (大学) 山田和麻呂

理事 (大学) 原 淳、杉山鉦一

(会員) 加古文雄、浜島辰雄、木村信介

相談役 伊藤武雄、森田清松、加藤銀一、

明壁京一、高橋不倦

(提携大学は、名古屋大学医学部)

事務所を、不老会本部(名大内)におき、活動を

開始することとなった。

久野さんは、発表会のあいさつの中で、不老会の指針として「不老会五つの願い」を發表した。

- 一、私どもは感謝のために、この会員になる。
- 二、私どもは不老長寿を得るために、この会員になる。
- 三、私どもは希望に生きるために、この会員になる。
- 四、私どもは医学の進歩のために、この会員になる。
- 五、私どもは平和をこい願うために、この会員になる。

また、自らの心境をうたに詠んで披露した。

我が^{たま}霊は かばねをひらく 若人と

ともに医学の 扉ひらかん

(その細部は『光水漫録』第十二編「愛知用水と不老会」に記載されている)

4 提携の拡大と機関紙「不老」

設立発会をみた不老会は、久野庄太郎が同志と語らい、自らの親戚縁者が同意し、近傍知人が事務を手伝い、全くの手作りの会として動き出した。さらなる発展を願って、これ以降

5大学

風景

名古屋大学
解剖弔慰祭
平成15年10月16日



愛知医科大学支部総会
昭和61年11月16日

愛知学院大学
総会・慰霊祭
昭和53年11月17日



愛知 行事



名古屋市立大学
総会・慰霊祭
昭和61年11月18日



藤田保健衛生大学
総会・慰霊祭
昭和55年11月11日



5大学担当者会議
(愛水館にて)
昭和53年7月29日

春季総会と秋季総会を開催し、昭和三十七年の秋季総会では愛知用水建設中の犠牲者五十六名並びに成願者の追弔法要が併せて行われた。

昭和四十年九月には会員が千名に達し、愛知県文化センターにて記念総会が持たれ、つづいて昭和四十五年五月の春季総会は、二千名達成の記念総会として桜花会館で開催された。

この間に、三重大学医学部と提携開始。昭和四十三年十一月四日、名古屋市立大学医学部と提携開始。昭和四十三年十二月十四日愛知学院大学歯学部と提携開始。提携大学は四大学となる。

また、他の献体団体との交流も広がる。昭和四十三年四月には長崎大学医学部における篤志解剖懇談会に出席して他団体と交流し、昭和四十五年三月に、岡山大学医学部（ともしび会）における日本篤志解剖大会に出席し、全国組織結成について話し合う。昭和四十六年三月、篤志解剖全国連合会が結成され、久野庄太郎が初代会長に就任した。

このような不老会の休むことなき活動を精神的に支えたものは、久野さんの『躬行者』であった。『躬行者』は、一人雑誌『実践人』の主宰者森信三先生の一人雑誌発行の奨めに大いに共鳴し、とくに心を動かされたのは次の事項であった。

- (1) 一人雑誌は自分の生き方を追求している人でないとつづげられないものである。
- (2) 無名の人で発行部数は五十部か、せいぜい百部でよい。狭い範囲の知友にハガキ代わりに毎月配る。
- (3) 人間の欲望の一つである、自己表現欲を満し得ること。
- (4) ことばより筆の方が残しやすいし、責任がもてる。

(5) 日々の生活態度が自覚的になる。

かくて、久野さんは発刊を決意され、『躬行者』と題号を決め、不老会発会式間もない昭和三十七年十月五日に創刊号が世に出て、毎月五日発行がつけられた。

第四十二号（昭和四十一年三月五日）には、附録として「不老会だより」が発行された。

久野さんは、先の「不老会五つの願い」とともに、自らの戒めとして、次のような八カ条を発表された。

不老会 はちもっくん
八勿訓

- 一、健康について養生を忘れること勿れ。
- 二、病みて悲観せずと言うことを忘れること勿れ。
- 三、百万人に達するとも会員の勧誘を忘れること勿れ。
- 四、道心なきものは誘わずと言うことを忘れること勿れ。
- 五、遺体献納は、我が身のねがいなれば、寸償を求めずと言うことを忘れること勿れ。
- 六、政治、宗教などに会員を誘い、或いは本会を利用せず、ということ忘れること勿れ。
- 七、出世の恩を感謝し、天地と共に希望に生きることを忘れること勿れ。
- 八、いかなることに逢うと決心を忘れること勿れ。



名古屋商工会議所ホールは、つめかけた会員たちであふれた



総会のあと、先導車、保健衛生大学連帯太鼓部を先頭に栄に出てテレビ塔まで街頭パレード



会員8000名突破

記念総会 (昭55.10.27)

はすごかった!!



米の繁華街を通過
するパレード



テレビ塔下での集会



これが、不老会存立の根底となしている。

『躬行者』第百三号（昭和四十六年六月五日）より「不老」となり、不老会機関紙として脈々と、その精神が受け継がれてきて、現在の「不老」の号数は『躬行者』創刊号より引き継いだものである。その間に、昭和五十七年二月五日には会員九千名突破記念・不老会創立二十周年記念号が発行された。

5 財団法人不老会となって

このような献体運動の社会的意義を明確にするため財団法人への組織拡大を申請し、昭和四十七年六月二十八日には文部省（現文部科学省）より財団法人不老会の設立が認可された。

ここにいたるまでには三重大学の藤村教授が、当時の剣持文部大臣と第七高等学校・東京大学で同期昵懇じっこんの中であったことから、久野会長・早川三郎事務局長とともに大臣に直接陳情されたり、勝沼名大総長などのバックアップもあって法人の認可が実現した。これを機会に、不老会事務所を名古屋大学内より、久野理事長邸内の愛水館（旧隠居所）に移した。そして、この年の十月より眼科杉田病院と提携して献眼活動を開始し、献体献眼に社会的貢献の充実を実現した。

財団法人となって四カ月、昭和四十七年十月三十日、会員三千名突破記念総会を熱田神宮文化殿で開催（成願者五百名、献眼者二十一名）。

昭和四十九年五月十八日、名古屋保健衛生大学医学部（現藤田保健衛生大学医学部）と提携

を開始し、同年六月二日、会員四千名突破記念総会を熱田神宮文化殿で開催（成願者六百六十名、献眼者六十名）。同年九月十七日には、不老会発足以来行ってきた追弔法要を改めて、愛知用水建設犠牲者の法要と併せて成願者の追悼のために第一回献体者慰霊祭を行い、以後毎年供養を行ってきた。

昭和五十年十一月十五日、会員五千名突破記念総会（成願者八百五十名、献眼者百三十五名）を熱田神宮文化殿で挙行。（前述のように、この席上にて鰐部好一、森田清松、筒井栄太郎が表彰された）

財団法人として認可を得てから、会員の献体への意識が高まるとともに、社会的認識も広まってきて、続々と新入会の申し込みがみられるようになった。

また、献体の提携をしている五大学では、献体登録者と大学との連携を深めるため各大学に支部を設け、大学支部総会が持たれてきた。これをうけて地域にも支部を設けて、より多くの人に不老会の存在を理解してもらおうという機運が生まれてきたが、これに先立って昭和四十八年三月緑区支部結成、昭和四十九年四月千種区支部結成、昭和四十九年五月西区支部結成と、市区郡ごとに地域支部の設立がすすみ、支部旗を配布し、昭和五十年一月には支部長会を開催できるまでになった。

献眼活動も愛知県眼衛生協会（アイバンク）が設立され、昭和五十一年三月一日より献眼事業が開始されたので、昭和四十七年よりの献眼活動は、これに統合移譲し、アイバンクとの連携のもとに角膜提供運動に移行することとした。

昭和五十二年九月六日、会員六千名突破記念総会を東別院青少年会館で開催（成願者千七十五名、献眼者二百九十五名）。昭和五十四年六月十六日、会員七千名突破記念総会を東別院青

少年会館で開催（成願者千四百七十名、献眼者四百二十四名）。同年八月二十七日、不老会事務所を久野理事長邸内愛水館より名古屋商工会議所ビル内に移した。

昭和五十五年十月二十七日、会員八千名突破記念総会（成願者千七百名、献眼者五百三名）を名古屋商工会議所講堂で開催。昭和五十八年四月十六日、会員一万名突破記念総会（成願者二千二百八名、献眼者七百八十三名）を名古屋商工会議所講堂で開催。

両記念総会とも、不老会の一層の周知啓蒙と献体の塔建立を願って、総会に続き保健衛生大学連帯太鼓部による和太鼓の演奏を先頭にして、会議所ビルよりテレビ塔下まで街頭パレードを行った。

そして、一万名突破記念総会以後は、各支部ごとに支部総会を開催することにした。また、三重大学医学部は、単独で三重不老会として活動することになった。

6 献体の塔の建立

〔献体の塔建立奉賛会総会〕（昭和五十七年六月八日）

基本的事項の決定

- 1 建立場所 名古屋市平和公園内（三ヶ根山という案も出た）
- 2 建設運動
 - 1、名古屋市長
 - 2、名古屋市平和公園会長 高間修道氏
 - 3、名古屋市議会
 - 4、名古屋市平和公園事務所

3 建設資金 献体五大学 内、私立大学各三千万円

会員

財界（名古屋商工会議所より名簿をもらう）

愛知県

名古屋市とくに建立する土地

愛知県医師会

4 献体の塔基本設計

塔の材質の検討

名古屋市は、戦後焼け野原の都市計画にあたり、市街地の土地に余裕を得るために市街地内の寺院について、寺は現地にそのまま残して、墓地を寺ごとに東山公園に移して、墓地公園を造り、市街地に土地の余裕を作り、道路を広く、まっすぐにし、市の中央に防火帯として緑地帯を設けた計画道路を東西南北に十字に建設した。この計画に対して寺側の代表として高間修道師が実施に踏み切った。これは名古屋市の田淵助役の畢生の事業として賞賛すべきである。

高間会長の推せんで晃設計の中安設計士が紹介され、基本設計が出来上がった。

当初は大理石で円型の九メートルのモニュメントを建設し、中の空洞に、献体者の名簿を納めるカルトを設け、天井に明り取り窓（五〇センチ）をつけて、大理石はユーゴー産の一・五メートルの塊を積み上げる設計であった。

これを電子計算機にかけて円形になるようブロックを作り、各石が組み合って、絶対に崩

れない形であった。

折から、浜島がエジプトのシナイ半島のプロジェクトに参加して帰国し、

「大理石は高いことと、果たして電算寸法通りに石工が芸術品のブロックを造るだろうか？ 間違つて、組み変えることになった場合、組み合わせ部分が折れる可能性がある。エジプトのトムモスクが五千年ほど前にできているものを見たが、穴だらけである」

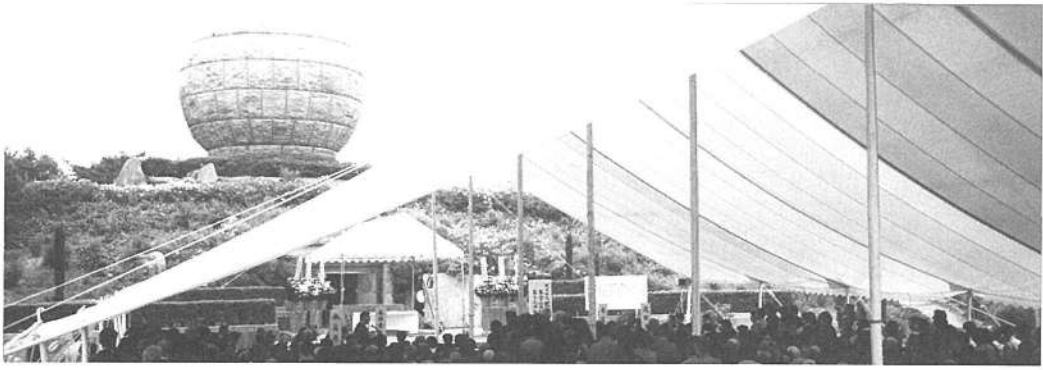
と言つて、設計を単純なものにすることを提案。石も大理石でなく、花崗岩で結晶の細かいものとし、内部は鉄筋コンクリートの頑丈な筒をつくり、これに各ブロックをアンカーで結びつける構造にした。石屋はこれならできると安心した。

ちなみに、中安案で関ヶ原の大理石屋に模型を作らせてみせたら、円型のものでできず苦勞し、ついうまくできなかったと言つてきたので、花崗岩方式で浜島案を採用することにした。また、花崗岩も、幡豆石、岡崎石、恵那石があり、結晶の大きいものほど風化が早いから、名古屋城の石垣（伊勢の長谷山、小牧の岩崎山）の石から八事墓地、岡崎の新霊苑、加藤石材、額田石材、幡豆石材などを訪ねて額田石材の石が一番結晶が細かいので、これで、役員全員が納得してもらうように現地で説明会を開いて決定した。これで変色、亀裂が入れば止むを得ないと念を押した。

設計について、加藤石材と相談して、池上さんを紹介してもらい、現段階で石工のできる最高の方法をもって加藤石材と額田石材の協力によって一山の石で造り上げる計画をした。

建設費五億円で平和公園に

建設場所も、平和公園の西北角、最高の所に一六、〇〇〇平方メートルほどの土地を名古屋



塔そびゆ——平成8年5月8日、第22回 顕彰式の日

屋市が用意してくれた。平和公園は東南角に平和記念堂、西南角に公園事務所、動植物園と標高も八二メートルで最高の場所であり、さっそく建設委員長に決まった水野甚市、事務長の牧野善一、募金係の村上悠紀雄、会計係の国重乾一などに現地を見てもらい、最高の場所とみんなに喜んでもらった。

そして、最近奈良県の飛鳥の奥の壺坂寺に丈余の観音像が建設されたことを知り、建設委員会の有志で見学に行った。私は大変参考となり、委員一同、まず建設募金が先というところで、一応建設費五億円を目標に募金班を設け、名古屋商工会議所から協力をいただき、中電、東海銀行、東邦ガス、東海製鉄、トヨタ自動車など、毎日のように委員がおたずねした。とにかく、前例のないこととて、その趣旨から説明してまわらなければならず、暇と根気を資本にお願いしてまわった。

とくに愛知学院大学の山田鉄仙学長の提案で献体五大学のうち私立三大学がそれぞれ三千万円を引き受けて下さり、大変力強く感じ、勇気づけられた。

また、何によらず高松宮殿下にご相談申し上げたので、厚かましく久野、水野、牧野、浜島の四人でお屋敷に参上し、趣旨を申し上げると、

「それはよいことだ。まず医者がまっ先に賛成しなければならぬなあ。解剖された人の靈魂が人魂となってふわふわ出ると医者が驚いて金を出す、そんなこともないしなあ。私は立場上、体を出すわけにいかぬから、この金一封を元にして募金してくれ」

と励まされて、一同大変恐縮、感激して、以降、宮様の御心のあるところを話してまわり、力づけられた。そして、完成の式にはぜひ殿下の出席をお願いした次第

である。

この機会に、各地元の方々のご協力を得るため各支部に婦人部を設け、きめこまかに献体の塔への協力と協賛をいただけるように活動した。

昭和五十七年の春先には、献体の塔募金の旗を立てて、八事の興正寺の縁日には街頭募金をして、募金とともに趣旨を知ってもらうために役員全員総出で市民に働きかけた。

そして、昭和五十七年二月五日、献体の塔建立奉賛会を開き献体の塔建設に必要な資金ができたことを受け、同年八月七日、建設計画発表にこぎつけることができた。

昭和五十九年五月十一日に起工式（佐藤工業）を行い、昭和六十年四月十一日、高松宮殿下、同妃殿下の御台臨を仰ぎ、「献体の塔」竣工式とともに献体者感謝式を行うことができ、「不老」は「献体の塔」竣工記念特集号を発行した。

同年五月十六日、第一回献体者顕彰式並びに第十一回成願者みなもとご名札納め式を行う（以後、毎年五月中旬に実施することを決定した）。

当時の会員一〇、七二九名、成願者二、六二八名、献眼者九六五名、同年五月十六日、献体の塔建立奉賛会の解散式を行うことができた。

7 不老会の進展

高台に輝く「献体の塔」は、『躬行者』の「躬」、天壤無窮の「窮」を数字に置き換えて、直径九メートルとし、医学の進展と世界の平和を希求する人の輪は無限であることの形としての球体として、不老会員の心のシンボルとして仰ぎ見られている。

「塔」周辺の緑化を願ってオカメツタを栽植したが、ツタの生育よりも先にセイタカアワダチソウが繁茂してきたので、昭和六十一年五月七日、第一回「献体の塔」清掃作業として除草を行った。以後、五十二支部を地域的な六ブロックに分けて、年間六回の清掃を実施している。

平成二年一月には、全五十二支部に支部旗を再配布し、支部の位置づけを明確にしたことが、その後の支部活動を充実させていった。

また、このころより、提携五大学における解剖学自習用遺体を充足することができるよう



不老会会員による献体の塔の清掃風景
上は平成12年4月7日、下は平成16年11月9日

になり、不老会と五大学との連携が深まり、不老会の献体運動が充実してきた。

昭和六十三年二月二十九～三十日、篤志解剖全国連合会第十八回総会（当番校＝名古屋市立大学）、平成九年三月二十四～二十五日篤志解剖全国連合会第二十七回総会（当番校＝愛知医科大学）のおり、この総会をそれぞれ積極的に賛助して五大学と提携して運営している不老会のはたらきと献体の塔の威容を総会参加者にみていただいた。

平成四年五月十四日、第十八回献体者顕彰式並びに第二十八回成願者ご名札納め式に併わせて不老会創立三十周年記念式典を挙行。

平成八年五月二十九日には、久野理事長のご家族よりの強い要望があり、副理事長浜島辰雄が第二代理事長に就任、前理事長久野庄太郎を名誉理事長に推戴した。翌九年四月八日、名誉理事長久野庄太郎翁がご成願され、名古屋大学に献体された。同年六月五日、「不老」（平成九年六月号）を名誉理事長故久野庄太郎翁の追悼特集号として発行した。そして、同年八月二十三日、「久野庄太郎を偲ぶ会」を、農村同志会・愛知用waters地改良区・名古屋南部臨海企業連絡協議会・愛知県冷熱利用協会等九団体と共催して熱田神宮会館において執り行った。

平成十二年五月二十六日、浜島理事長（八十五歳）の健康上の申し出により、前半田市長竹内弘を第三代理事長として迎え、前理事長浜島辰雄を名誉理事長に推戴した。

平成十四年五月二十八日には、不老会の生みの親である愛知用水が「命の水＝暴れ川を制圧せよ」と題して、NHK「プロジェクトX」として放送され、大きな反響を呼び、視聴者の要望にこたえて、十二月にアンコール放映がなされた。まさに愛知用水は不老会の源流である。

この間に、提携五大学が教育上必要としているご遺体数を献体者により十分に満たすことができるようになり、五大学からは全面的な信頼を得ることができ、不老会の献体運動に強力な支援をうけている。そして、不老会運営の経済的安定を図るため、新たに団体や企業が賛助会員に加入されることによって経済的基盤の強化が図られた。

財団法人として認可されている公益団体の組織と運営の公明性の確立と、団体の基本的事項の公開とについて、行政面よりの指導があった。それに関連して、役員の年齢制が明示され、竹内理事長がそれに抵触するため、元愛知県議会議長小田悦雄を第四代理事長として迎えた。なお、竹内前理事長は不老会創立四十周年記念事業の完遂のために常任顧問に就任された。